

## フィリピン研修参加報告書

京都大学文学研究科学部 3年 宇治有芽里

今回は主に CFO という機関でのインターンシップを主に行いながら、様々な施設見学、インタビューを行った。

CFO は移民として外国に行くフィリピン人が全員訪れ、移民許可のステッカーをもらう場所である。そこで私達は日本について紹介するプレゼンテーションを行うかわら、特に結婚移民の人にインタビューを行った。その中で、私がボランティアをしていた JFC の子供たちが、どのような状況にあるのかということが垣間見えたように感じた。もちろんさまざまな事情をもった人がいるが、移民として日本に来ようとしている人の多くに言うことが、日本についてほとんど知らないということである。そもそも旅行ですら日本に行ったことがない人がほとんどで、日本についてのイメージがないのも無理はないのかもしれない。さらには日本の生活の予定がほとんど感じられないということである。働きたいのか、働かないのか、それを夫はどう思っているのか、家族に送金をするのか、などということを知ると、働かないけど家族に送金したいなどという声もきいた。しかしどこで、どんな生活をするのかという計画を夫とほとんど話し合っていないように感じました。

こういったフィリピン人の人々に感じられたのは「なんとかなる」という気持ちである。「なんとかなる」というのは日本にいる JFC の子供たちからも感じていた。そしてそれがしばしば、進学の際に問題になったり、またその母親と学校との間のトラブルになったりしている。これを雨笠さんや姫野さんといった、フィリピンとなじみの深い日本人にきくと、「なんとかなる」という気持ちがフィリピン人のメンタリティなのだと教えられた。細部にまで気を遣う「日本」の典型的な文化とは一線を画するのである。

私達はまたさくら日本語学校という、日本に技能実習生として来る人のための日本語学校に見学に行った。技能実習生は日本に来る前に 4 か月の実習があるが、教えられていることは日本語だけでは決してない。日本の文化、慣習などといったものを一つ一つ細かいところまで教えていた。例えば挨拶を大きな声ですること、太らないこと、トイレをきれいに使うこと、ごみを所定のルールに従って出すこと、などである。これらおよそ 400 項目が 4 ヶ月の内に叩き込まれる。私が一番面食らったのは客人が来ると、ものすごく大きな声であいさつをされることである。まるで軍隊の養成所のような印象を受けた。しかしさくら日本語学校の代表によると、これが受け入れ先の日本企業に好評であるそうだ。洗脳といわれても仕方がないが、たった 4 ヶ月で日本の文化を教え込むのはこの方法しかないということである。特にフィリピン人という、文化的側面では日本と相いれない人々に教え込むのは非常に厳しい方法を取らなければならないという。

JFC の問題に目を向けてみると、さくら日本語学校のように、子供たちが文化を体系立てて教えられることはない。またその母親でさえも、CFO でほんの数時間のレクチャーが行われるだけである。先述のように、さくら日本語学校のやり方は前時代的で、軍隊的である印象を受ける。しかし文化、言葉をわからないまま日本に入っていく、困るのはフィリピン人本人である。今後はさらに踏み込んだ文化教育の必要がある。

もう一つ、研修の中で考えたのは、「結婚」についてである。結婚移民はほとんどが女性である。私達は彼女たちに多くの質問をなげかけた。夫とどこで出会ったのか、夫は日本で何をしているのか、夫は何歳なのか、なぜ夫と結婚したのか、などということである。その一つ一つの答えが驚きであった。自分の働く店で出会い、それから夫が 2, 3 回フィリピンに来る間に結婚を決めた、夫とは年が 20 歳離れている。年齢差はさることながら、結婚に至るまでのスピードがかなり早いと感じました。またさらに驚きだったのが、彼女たちのほとんどが日本語も、英語も堪能ではないということである。夫とのコミュニケーションについて尋ねても、日本語、もしくはタガログ語で会話をしているという。しかし夫もタガログ語はほとんど話すことが出来ない。おそらく、察するにほとんどの夫婦の間で言葉によるコミュニケーションが円滑になされているとは言い難いのであろう。

ここで結婚とは何か、という問いが頭に浮かんでくる。確かにいわゆる「偽装結婚」であるカップルもかなり

多くいる。「偽装結婚」というのは、配偶者ビザの取得を目的とし、日本人側にお金を支払って結婚してもらうということである。職員の話によると「偽装結婚」と疑われるケースは日本へ行く結婚移民で3～4割である。しかしインタビューをした人のほとんどが、たとえ偽装とまではいかなくとも、「奇妙」に思える結婚であった。コミュニケーションがとれない、「不自然」に開いた年齢、短「すぎる」交際期間、すべてが私にとっての「結婚」というイメージを崩すものであった。

この「真正結婚」と「偽装結婚」の違いはどこにあるのか。結婚とは少なからず愛情が介在しているものだという「conservative」な結婚観では、彼女たちの結婚を理解することはできない。本人たちさえ幸せであればいいのだ、という考えも通用しない。愛情のない「真正結婚」も、単なる「偽装結婚」もどちらも「幸福」や「自己実現」を目指した結婚ではあるからである。

結婚という概念はある意味文化でもある。いかに文化的につくられた結婚という概念の中で生きてきたのかと感じた。外の世界に出てみると、必ず何らかの異文化に出会う。そしてそれを咀嚼し、理解し、受け入れるというプロセスを経ていく。今回は、留学とも、旅行ともまた異なるプログラムであった。その中で単なる異文化との出会いというだけではなく、異文化をまざまざと見せつけられたように感じた。今後はそのわからないものをどう解釈するのかという課題がある。私にとってのこのプログラムは何かを学んだというだけでなく大きな疑問をなげかけられたように感じた。もっと外に出なければという焦燥感、出てみたいという好奇心の両方を抱いた。